

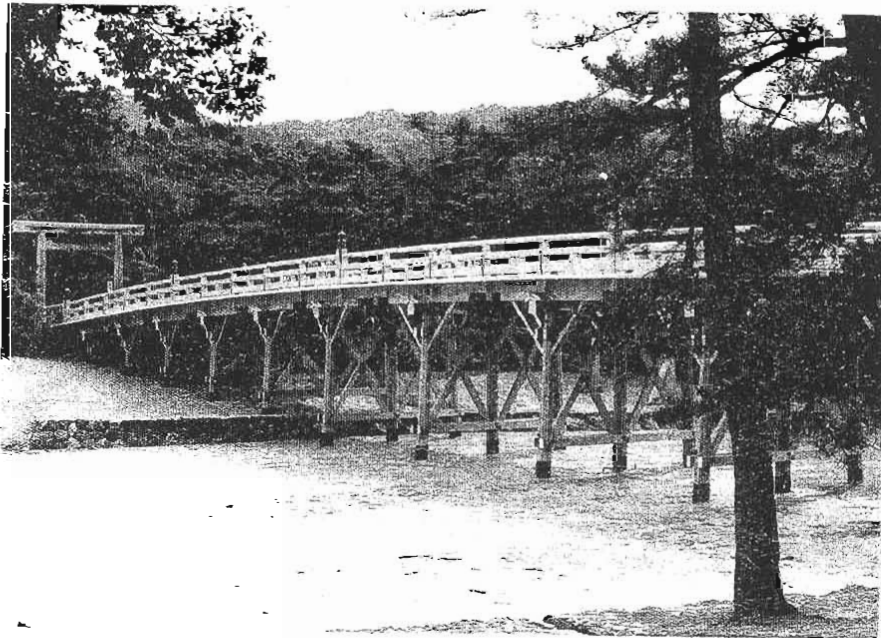
5日目

伊勢市吹上町（伊勢市駅前）～ 伊勢市宇治館町（内宮）

〔 帰路 内宮～奈良大学 〕

吹上一丁目（日の出館） - 外宮（豊川町） - 岡本町 - 小田橋 -
尾上町 - 倭町 - 古市町 - 中之町 - 桜木町 - 牛谷坂 -
宇治浦田町 - 宇治中之切町 - 宇治今在家町 - 内宮（宇治館町）

〔 帰路 〕 内宮 - 五十鈴川駅（近鉄） - 平城駅 - 山陵八幡神社 - 奈良大学



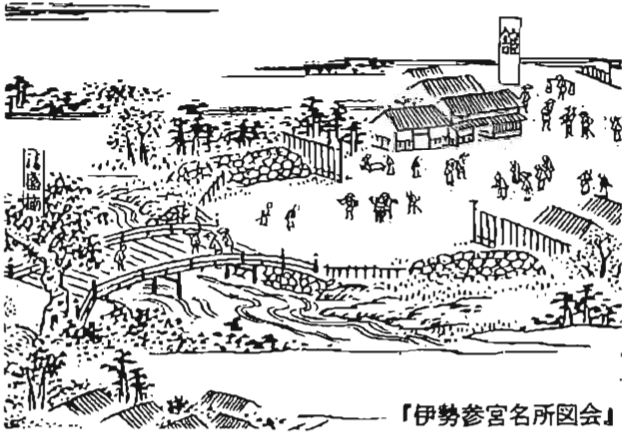
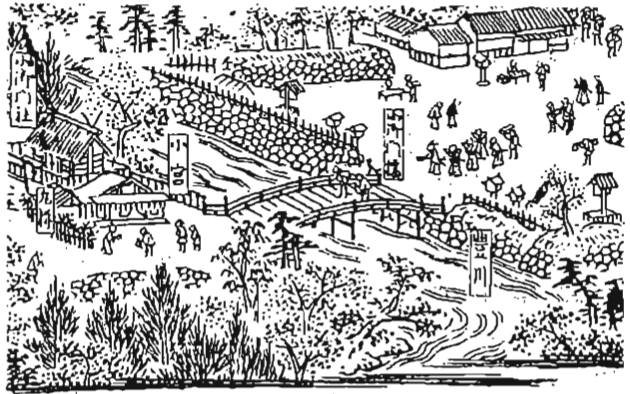
いよいよ最終日である。距離が短いこともあって、この日の出発は例年10時頃と遅い。足を痛めている者、前夜痛飲した者、それぞれに身体はつらいわけだが、泣いても笑っても最終日。伊勢に着いた楽しさ、嬉しさを楽しむ朝である。そのせいか、皆それぞれに晴れやかな表情に見える。

山田

日の出館を出発、昨日の道に戻る形で伊勢市駅前から神宮参道に入る。少々信じがたいが、昭和36年(1961)まで、この狭い参道を路面電車(三重交通神都線、「神都電車」)が走っていた。土産物屋などの並ぶ参道を500mほど進むと町並が途切れ、昨夕通った三重交通の外宮前バスのりばが見えてくる。ここが神都線の外宮前停留所と、明治村に移築された旧宇治山田郵便局の跡である。そして、その奥に伊勢神宮外宮(豊受大神宮)の杜が見えている。

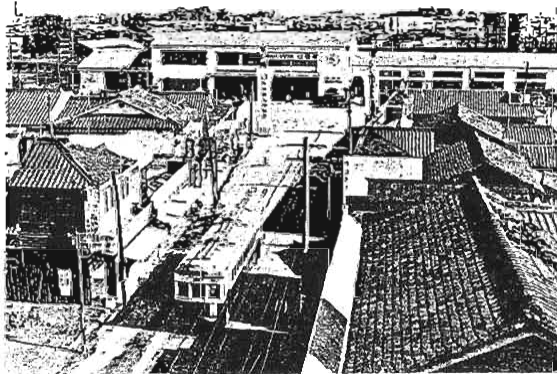
外宮への参道は、一の鳥居からの表参道のほか、旧宮前館の西側裏手、参拝者用駐車場の前から入る北御門(社みど)参道もある。一の鳥居から参拝するのが正式で、宝来講もこちらを通っているが、宮川方面から参拝する場合は北御門のほうが便利のため、江戸時代にもよく利用されていたらしい。『伊勢参宮名所図会』は一の鳥居と同様の賑わいをみせる北御門参道を描き、『新撰伊勢道中細見記』も「館。是より宮中北御門へ入。勅使上使ハ一の鳥居御参入有。諸国の参宮人わ、一の鳥居より参入すべきなれど行程近く便利よろしき故、多ハ北御門より参入するなり」とあり、北御門参道を庶民の参宮路として紹介している。

また『伊勢路見取絵図』では、この北御門の前に「館(はり)町」という文字が見える。内宮同様、宮人などの斎館が建っていたためこのように称されたが、寛文年間に斎館を宮域に移転し、そのあとへ民家が建って町を形成していた。明治35年(1902)周辺整備のため民家は買収され、現在は神苑となっている(『制御上』)。



『伊勢参宮名所図会』

「神都電車」



神都線は、山田(現伊勢市)駅前・外宮・内宮・二軒茶屋・二見を結び、「神都電車」として親しまれていたが、小回りの効くバスに観光客を奪われ廃止となった。伊勢の正月名物である初詣客大輸送をはじめ、多客期の混雑をさばくことができなかったのである。

現在、大晦日の伊勢の街には、三重交通の各営業所から路線用・観光用を問わず予備のバスが集結してくる。元日の外宮前～内宮前線は、乗客が乗り次第発車という無ダイヤ状態。伊勢ではこの正月大輸送を乗り切れない交通機関は生き残れないのだ。

外宮 豊受大神宮

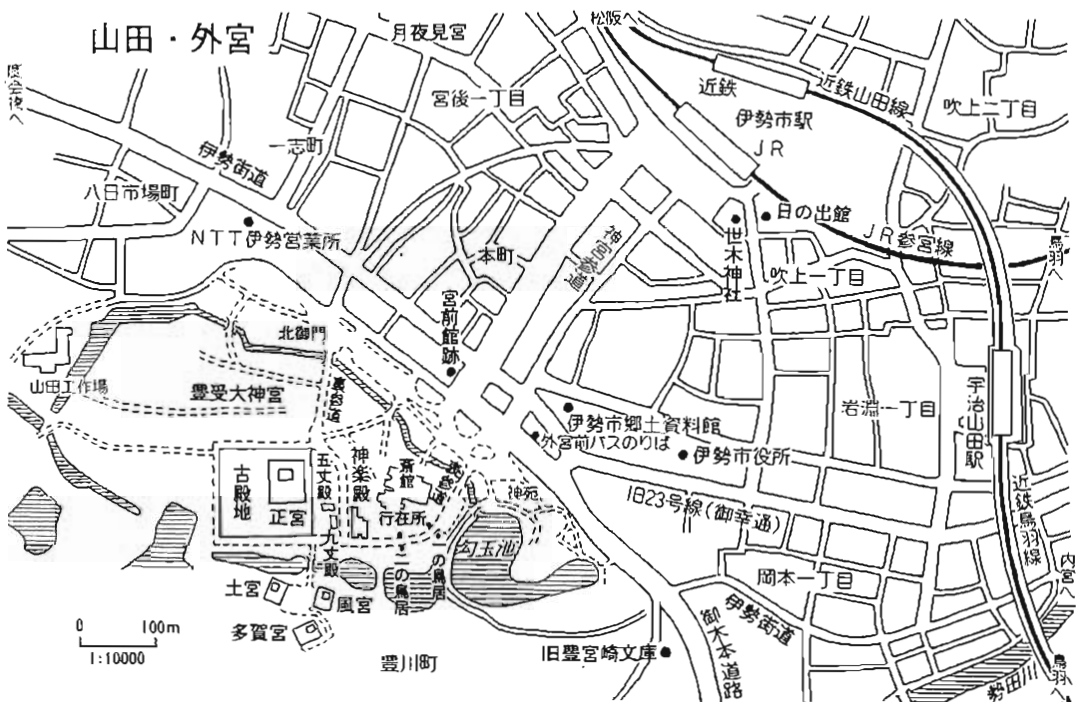
一般に外宮といわれているが、正しくは豊受大神宮という。「外宮」とは皇大神宮の外つ宮の意味である。「げくう」と濁音付きで読む人が多いが、伊勢では濁らずに「げくう」と読み、内宮も同様に「ないくう」である。ちなみに齋宮も「さいくう」と読んでいる。

豊受大神宮は、食物の神・稲米の神である豊受大神を祀っており、宮川のほとり、山田原の地に鎮座する。豊受大神は『古事記』に豊宇気毘売神としてみえる女神である。気は「食」「饌」で食物のことを指す。天照大神の食する大御饌（食物）の守護神であり、転じて農業、さらに拡大してすべての産業の神とされる

内宮、外宮の起源については『古事記』の天孫降臨の条に「この二柱の神（天照大神とその形代としての神鏡）は、さくくしろ、五十鈴の宮に拝き祭る。次に登由宇気神、こは外宮の度相に坐す神ぞ」とある。

しかし、豊受大神宮の鎮座そのものについては記紀に伝承がなく、延暦年間(782~806)の『止由気宮儀式帳』に見えている。すなわち、第21代雄略天皇(5世紀)の夢に天照大神があらわれ、「自分は独り身で寂しいから、朝夕に奉る御饌の神として丹波国比治の真名井原よりトヨウケノ神を迎えよ」と告げたので、同天皇の22年9月にこの神を山田原の地に迎え、御饌殿を建てて朝夕の大御饌の儀を始めたという。

では、神宮司庁刊の『お伊勢まいり』を道案内として、外宮の神域を順に見てみよう。外宮の神域内は、手水舎が左にあるため左側通行となっている。



大きな常夜燈の建つ正面の入口を入ると、砂利を敷き詰めた広場があり、奥に小さな和橋が架かっている。これを渡るとまた広場状になっており、広場左側に手水舎、右側に楠の木、参道正面に鳥居が見える。

第一鳥居口御橋 今渡ってきた小さな和橋を正式にはこう呼ぶ。防火のために造った堀川にかけられており、「火除橋」と通称されている。現在、このあたりは整然と砂利が敷かれ、いかにも神域という感がある。しかし、先述したとおり江戸時代には民家が並び、町があった。明治時代以降、立ち退きと整備が進み、現在の姿となっている。

手水舎 ここで手を洗い口をすすぐ。これも一つの禊、祓である。手水の仕方にも作法がある。まず杓に水を汲み、左右の手を洗う。次に左の掌に水を受けて口をすすぐ。杓に直接口を付けるのは不作法といわれている。最後に杓をたて、中に残った水で杓の柄を流すのである。この作法がいつ頃からのものか詳細は分からないが、神道の教義や作法については、永い伝統を持つ祭祀儀礼とは対照的に近世の成立が多く、近世の衛生観を反映している可能性もある。

清盛楠 参道をはさんで、手水舎の反対側に楠の大木がある。樹高10m、胸高直径3m余りの一株の楠である。平清盛（その子重盛という説もある）が勅使として参向したとき、冠に触った両側の枝を切らせたという伝説がある。

第一鳥居 火除橋から見えていたのがこの鳥居で、一の鳥居ともいう。神明造で、ここを境に頭上が開けて明るい手水舎側と、神々しい神宮杉の大木が聳える正宮側では雰囲気が一変している。そんなためもあってか、この鳥居をくぐるといよいよという気持ちになる。

第一鳥居をくぐると、表参道は右へと曲線を描いてさらに奥へと進んでいく。

外宮齋館 参道右手の大きな門がこの館である。祭典のとき、神職が参籠の潔斎をして、心身を清める宿館である。

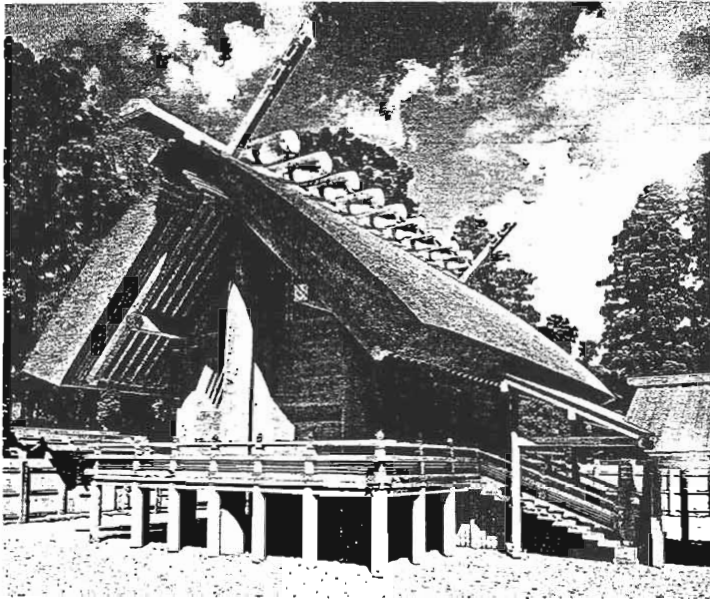
行在所 齋館の奥にあり、天皇が参拝時に参籠する場所である。

やがて参道に二つ目の鳥居があらわれ、これを抜けると参道の幅は広がって、神楽殿や正宮の並ぶ外宮神域の中心部に出る。

第二鳥居 この鳥居では、奉幣（幣帛を奉る）のとき、幣帛や勅使の修祓（おはらい）が行われることになっている。感覚的にいえば、二つの鳥居の間は、杉の大木のトンネルのようでもある。

外宮神楽殿 第二鳥居をぬけて右手の入母屋造の建物で、接続して神札授与所がある。一般の御神楽の奉奏、御饌を供えての祈禱、献金、御神札、またお守り、曆の授与などを扱っている。御神札などの授与、神楽の奉奏などは参拝の後というのが正式な順序になるため、左側通行の外宮なら復路の左側、つまり往路の右側に神楽殿がある。内宮は右側通行になるのでこの逆である。

四至神 この外宮の四囲を守る神である。神札授与所の西側、石原の東南の角に祭壇がある。小さい石畳の中央に一本の榊が植えてあり、その前に三つの石が並んでいる。



豊受大神宮 正殿

〔『お伊勢まいり』(神宮司庁)より〕

九丈殿 外宮神楽殿の西にある板葺、切妻造の建物。外宮の摂社、末社、所管社の遙祀が行われる。

五丈殿 九丈殿の北にある板葺、切妻造の建物。雨天時の修祓、遷宮諸祭の饗膳(儀式としての宴)などが行われる。

大庭 五丈殿と九丈殿の前の石原は昔からこういわれている。奉幣のお祭りのときの玉串行事が行われたが、現在では正宮御垣内の中重で行われるようになった。ただ、遷宮祭時の玉串行事は古式のままここで行われる。

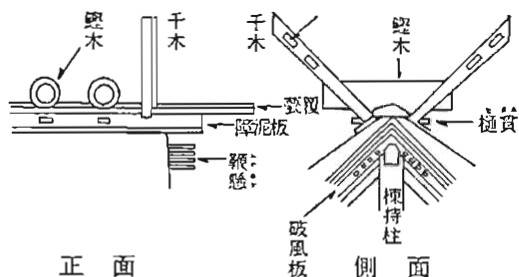
神楽殿・九丈殿の前を抜けると、参道は長方形の広場状となる。その一番手前右側が、平成5年(1993)の第61回式年遷宮で新しく建てられた正宮である。平成6年(1994)3月までは、その西側に今回の遷宮までの古い正宮も残されており、新旧ふたつの宮がそっくり同じ造りで並んで建つことになる。

豊受大神宮正宮 豊受大神宮は、先述のとおり豊受大神をまつっている。また相殿神として御伴神を東に一座、西に二座をまつる。

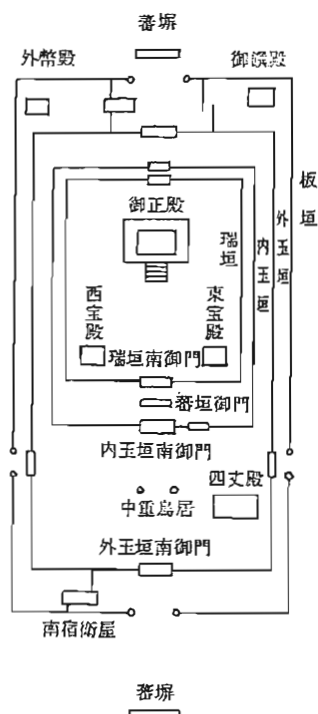
正殿と付属の建築群は、四重の御垣で囲まれている。外から内へ、それぞれ板垣、外玉垣、内玉垣、瑞垣といい、板垣の外に蕃垣がある。一番奥の瑞垣の内を内院といい、最も清浄な聖域とする。板垣の入口が板垣南御門で、神明型の鳥居が建っている。これをくぐると、正面に純白の絹の御幌がたれる外玉垣南御門がある。この門前が一般の拝所となる。

参拝の作法はまず、板垣の外、板垣南御門の正面に立つ蕃垣の陰に、正殿から見えないよう荷物等を置き、板垣南御門をくぐる。先達が前に出て、全員で二礼、二拍手、一礼を行う。

呼吸が揃ったときは、気分もよい。思わず皆で顔を見合わせ、「決まったね」と目で話すときもある。



豊受大神宮の屋根と垣の構造
〔『お伊勢まいり』(神宮司庁)より〕



参拝後は神宮の建築群を観察してみよう。外玉垣南御門の左方から正殿の屋根を拝することができる。正殿は萱葺でその棟に鯉木が並び、屋根の東西両端に千木がそびえ立っている。この鯉木や千木には、外宮と内宮でわずかな差がつけられており、外宮正殿は鯉木9本、千木は先端を垂直に切りおとした外削である。ちなみに内宮は鯉木10本、千木は先端を水平に切っており、うちまと呼ばれる。鯉木の数は、外宮関係が奇数、内宮関係が偶数で、それぞれ相当する関係にある建物は「外宮の本数+1=内宮の本数」というのが原則である。

正殿の足元は直接見ることができないが、檜の素木造で掘立式(柱の本を直接地中に埋めて建てる方法)という純日本風の建築様式である。こうした伊勢神宮の建築様式は、一般の神社の神明造と区分して、唯一神明造と呼ばれている。(建築については「内宮」の項で詳述)

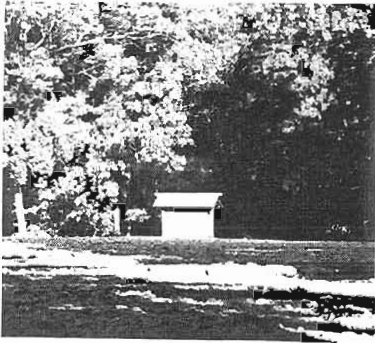
正殿の前方(南方)両側には、東、西の宝殿があり、お祭のとき奉られる幣帛や古神宝などが奉納されている。正宮の後方(北側)にも、祭祀にかかわる建物群が並ぶが、正面からは見えないものが多い。

御饌殿 正宮の北にある井楼組、萱葺の建物。古代の床の高い穀物倉であった高倉の建築様式が残されている。この殿に毎朝夕2度、天照大神などの神々に食事が奉られる。日別朝夕大御饌という。いわばここは神々の食堂である。この殿は内宮になく、御饌津神(食物の神)である豊受大御神の社らしい建物といえる。

忌火屋殿 正宮の北にある、切妻造、二重板葺の建物。日別朝夕の大御饌をはじめ、諸祭典の神饌(お供え物)を調理する所、台所である。「忌火」とは清浄な火をいう。御火鑽具(錐の摩擦熱で発火させる器具)で切り出した火でお米などを蒸し、土器に盛って奉る。

御酒殿 忌火屋殿の西、板葺、切妻の御殿で、御酒殿神が鎮座する。昔はここで神酒を造ったが、今は神酒を忌火屋殿で造り、この御殿に奉納したのちお祭にお供えする。

御廄 忌火屋殿の北にある。皇室から牽進された神馬を飼っている。神馬は毎月1、11、21日の3回、紫地に白くぬいた菊花紋章の馬衣をつけて神前に見参する。



西御敷地 先ほども触れたが、平成5年(1993)の第61回式年遷宮以前に正宮のあった敷地であり、同時に次の遷宮で正宮を移す用地でもある。

式年遷宮の「式年」とは“定まった年”の意で、20年に一度、正殿以下、御垣内の諸殿、装束神室の一切を新しく調進することをいう。平成5年(1993)10月に第61回式年遷宮が行われたばかりである。(式年遷宮については144頁参照)

現在新しい正宮が建っている東御敷地は、前回の第60回式年遷宮(昭和48年、1973)以来、「古殿地」として過ごしてきた。平成2年(1990)から今回の遷宮に向けての準備が始められ、周囲に板塀が設けられて中を見ることができなくなったが、それまでは一面に玉砂利の敷かれた広い敷地と、正殿の床下中央部にある「心御柱(しんみくら)」の覆屋根が参道から見えていた(写真)。

「心御柱」は御神体よりも恐れ多いものといわれ、神宮に勤める者も「心御柱の正体」は、決して口外しないという。おそらく、神宮の信仰形態の根幹部分をなすものなのであろう。

また、この古殿地ごしに、正殿や付属の屋殿を見ることもできた。幾重もの垣に囲まれている神宮正殿の中では珍しく「脇のガードが甘い?」部分であった。正宮が東に移ったため、古殿地である西の敷地前の参道へは立ち入れなくなり、西の古殿地から東に建つ正宮を見ることはできない。したがって「古殿地ごしに見る正宮」は次の遷宮の翌春、平成26年(2014)まで見る機会がないわけである。

参拝を終えて退出する。宝来講では、参道に整列し、正宮の屋根を背景に入れての記念撮影が恒例となっている。

神楽殿の神札授与所で神札を頂戴する。伊勢講は、講組織の代表として代参を行うのであり、村に残っている者たちに神札を持ち帰る役目がある。宝来講の場合、そうした役目も、宗教的な意味もないが、「神札を授かる」ということには、講参りの象徴としての意味があるように思える。

多賀宮 土宮 風宮 宝来講では立ち寄らないが、参道をはさんで正宮の反対側、帰路でいえば右側の方へ分かれているのが、外宮別宮の多賀宮、土宮、風宮への参道である。別宮はいずれも正殿を簡素にしたような造りで、小ぢんまりしている。参拝者も少なく、意外に感じがよい。また、この参道の途中に石の橋がかかっている。大きな一枚岩で、その姿から「亀石」と呼ばれている。橋の下は川ではなく、外宮を取り巻くようにある御池の一部である。これを一の鳥居方向へ行くと、勾玉池につながっている。

勾玉池 表参道第一鳥居の東側、帰路でいえば右側の林の向う側にある外宮神苑の池。勾玉の形をしている。明治22年(1889)、財団法人神苑会によって造られ、神苑も整備された。毎年仲秋の名月の宵、ここで神宮観月会が行われている。

これで外宮の正宮を往復してきたわけだが、別宮などに立ち寄らなくても30分程度はかかってしまうから、広い神域内をじっくり見ようと思えばかなりの時間を要するはずである。

間の山

外宮神域をあとにして、再び外宮前交差点に出る。正面に広々とした三重交通の外宮前バス乗り場が見える。昨夕から何度も横を通っているが、この角度がもっとも広く見えるだろう。

御木本道路を右へ進み、マリア保育園前の信号を左に入るのが旧街道である。この交差点を右側に入れば旧豊宮崎文庫がある。外宮神官の学校・図書館として慶安元年(1648)開設されたものだが、明治になって失火で講堂を焼失、蔵書は神宮文庫に移った。現在ここには門と塀のみが残っている。

保育園の角を左折して御木本道路より分かれる。祖霊社前に常夜灯があり、濱田国末邸跡の石碑が立つ。濱田は衆院議長もつとめた代議士で、軍部を批判したいわゆる腹切問答で知られる。濱田といひ尾崎行雄といひ、戦前の三重には大物政治家が多かった。

約400m先の岡本町で近鉄宇治山田駅への道と交差、その100mほど先で近鉄鳥羽線の高架下をくぐり、すぐ小田橋(勢田川)を渡る。橋の架け替えや河川改修で往時をしのぶべくもないが、橋の傍らに由来を記した案内板がある。かつてはもう一本細い橋が掛かっており、浄・不浄によって通る橋を分けていたという(伊勢沼磯)。また橋を渡って道の左側、勢田川右岸の公園内には道標が立っているが、もともとここにあったものではなく、小田橋の一本北の糞子橋が架け替えられた際、そのたもとから移設されてきたものである。

街道を進むと、左手に万金丹の看板のある野間薬店がある。万金丹は道中薬、また伊勢土産としてもはやされた胃腸薬である。看板に「いせあさまがたけ」とあるのは朝熊ヶ岳のこと。以前は内宮裏から金剛証寺へ登る朝熊岳道沿いの山頂近くに店があった。登山鉄道が開通した昭和初期には、朝熊岳駅と金剛証寺の間ということで賑わったが、戦時中の昭和18年(1943)、鉄材供出によってケーブルが休止となり(その後昭和37年正式に廃止)、戦後の昭和30年代にはスカイラインも開通、朝熊観光のルートが大きく変わったため、岳道の店を畳んで伊勢の出店(現在地)を本店とした。

間の山

内宮と外宮の間にある間の山には、お杉お玉という二人の娘がおり、三味線をひいて銭を撥で受けるのが名物であった。「ねらひすまして銭なげ付けるに一度も当たる人なし」という。『東海道中膝栗毛』では、弥次郎兵衛がおもしろがって三味線を弾く娘に石を投げつけるが、撥ではねかえされて頬に当たりひどい目にあっている。また間の山の宇治側の坂にあたる牛谷にも同種の者がいたようである。『膝栗毛』には

夫より牛谷坂道にかゝれば女乞食共けはひかざりたるが往來に銭を乞ふ。又十一二の女子ども紙にてはりたる笠のいろどれるをかぶりて「やてかんせおんどさんじやないかいな。さきな嶋さん、はな色さん、ほかぶりさん、やてかんせ。ほうらんせ」とある。嶋さん、はな色さん、ほかぶりさんとは通行する男たちの服装を指して、縞の着物の方、縹色の着物の方、頬被りのかたと呼び止めている様子を示している。



『伊勢参宮名所図会』

道は尾上神社あたりから登り坂になって丘陵を越える。棒のようになっている足の最後の難関である。尾上町・倭町・古市・中之町・桜木町と細長く続くこの丘陵は、山田と宇治の間、外宮と内宮の間ということから、「間の山」と呼ばれている。道の左側には「間の山 お杉お玉」の碑が立っているが、お杉・お玉は江戸時代の間の山名物であった(☎135頁)。

間の山の北側入口にあたるこの坂道は、かつて「尾上坂」といわれたようだが(礪波礪波など)、現在「尾上」は坂の名ではなく、町名として残っている。ただし読みは「おのえ」である。このあたりは妻入りの民家が軒を並べており、旧街道の風情をよく残している。坂の途中の左側には、旅館・両口屋の古看板も残っているが、両口屋そのものの場所は移動しているようである。

これを上って行くと古市である。古市は江戸の吉原・京都の島原・大坂の新町と並び称される遊里で、「精進落とし」の参宮客でにぎわった。全盛期(天明年間)には70軒の妓楼が軒を並べていた。街道沿いには備前屋跡、油屋跡などの石碑が立っている。また、古市は芝居の盛んな地でもあり、古市芝居跡の石碑もある。当時、古市の舞台を踏めば人気役者として認められたという。

油屋跡の石碑を過ぎて、近鉄烏羽線を陸橋で越える。この陸橋の部分が油屋の敷地だったという。橋の上からは伊勢自動車道の高架橋、その後ろの朝熊山がよく見える。少々進むと、左手に長峰神社があり、その約100m先の電柱に「麻吉」の看板がある。

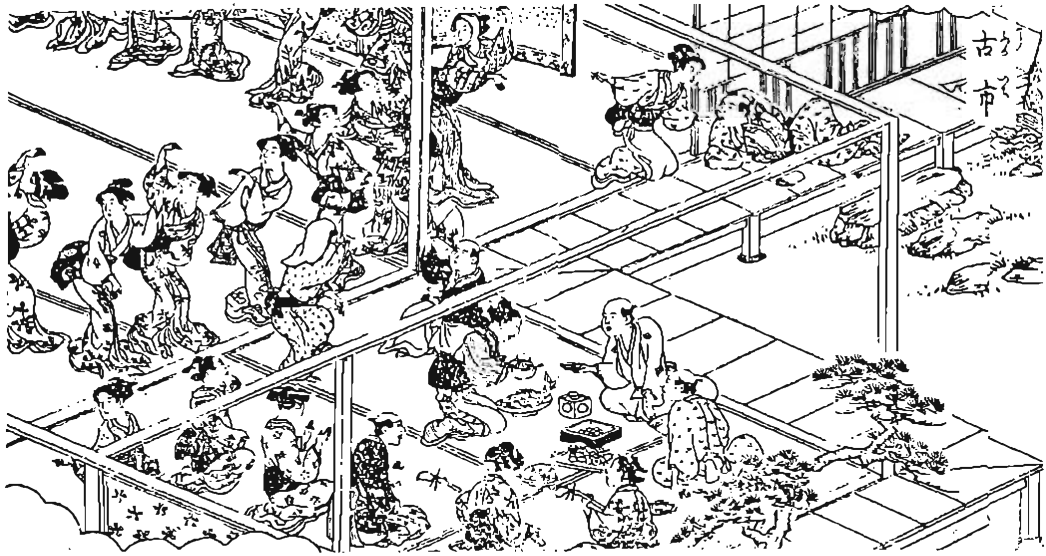
「麻吉」界隈

街道は直進だが、少々寄り道をして、看板の矢印に従い路地を入ると、現在も営業を続けている旅館「麻吉」の前に出る。近世には旅館ではなく料理屋であったという。古市は戦災に遇っているが、この麻吉は焼け残ったため、古市華やかなりしころの香りを残している。路地は本館と別館の間にかかる渡廊下をくぐり抜けて下へと続いている。この路地から見ると、麻吉の建物は、間の山東側の斜面に張り付くように、幾層にもなっていることがよくわかる。

また、麻吉前には「左 あさま二見へちか道 此おくつゝらいし」と刻まれた天保年間の道標もある。「つゝらいし」には鍾乳石の意味もあるが、ここではこの先のつづら稲荷を指す。同稲荷社は、つづら岩と呼ばれる巨岩を神体としており、『伊勢参宮名所図会』にも描かれている。この麻吉前を通る道は、寛永頃まで伊勢街道として使われていたが、牛谷坂を改修して街道としたため、役目を終えたという。それでも、このような道標が建てられたところを見ると、朝熊山や二見への近道として使用されていたのであろう。碑文からいえば、この道標の原位置はここではないと思われる。おそらく、付け替えて旧道となった麻吉前の道沿いに客を呼び込むため、現在の街道沿いに建てられたものであろう。



元に戻って街道を進むと寂照寺が左手にある。画僧として、また福祉事業でも知られた月徳上人ゆかりの寺である。これを過ぎると家並が途絶え、これまでの町並と不釣り合いな広々とした交差点



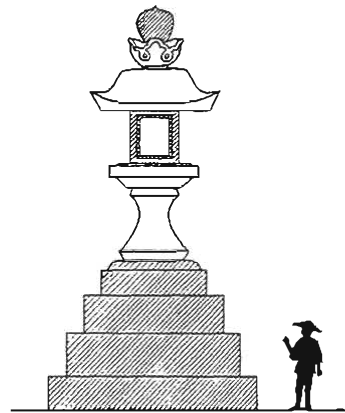
『伊勢参宮名所図会』

出る。伊勢自動車道との立体交差、およびその側道との交差点である。伊勢自動車道は、近鉄鳥羽線と同様、旧街道の足元を潜るように通っているが、近鉄が旧道とはほぼ直交しているのに比べ、こちらは浅い角度で交差するため、交差部の延長が長くなり、景観に対する影響がかなり大きい。

立体交差を過ぎて少し行くと、道路左側、三条前バス停の前に「月よみの宮さんけい道」と刻まれた明治7年(1874)銘の道標が立っている。「つきよみのみや」は伊勢市駅前の外宮別宮・月夜見宮と、近鉄五十鈴川駅付近の内宮別宮・月読宮の二つがある。この道を指示しているところから見て、これは「月読宮」であろう。月読宮は新旧2本の23号線にはさまれた島状の柱に、月読荒御魂宮、伊佐奈岐宮、伊佐奈弥宮の3社とともに鎮座している。

さらに妻入の家並を約500m進むと、この付近から神宮司庁関係の施設が目につきはじめる。左側には神宮研修所、続いて神宮司庁頒布部がある。頒布部は神宮で授けられる大麻(神札)、曆などを奉製している。道の向かい側には2基一組の大きな常夜燈が建っており、傍らの標石には「管理者」として、今はない「油屋旅館」の名が刻まれている。

ここより牛谷坂と呼ばれる坂を下る。この坂は寛永頃に改修されて街道となり、先述した麻吉前の道と交代した。近世末に二度目の改修が行われており、現在の道の左側に見られる切り通し状の斜面などは、この改修によるものであろう。その左手の斜面の上には、宝来講で「おばけ灯籠」と通称している自然石の常夜燈や、猿田彦神社境内北の碑があり、右手には倒壊した常夜燈がある。この常夜燈の残骸を計測してみると、もとは笠の一边が2mを超えるかなり大きなものだったことがわかる。あるいはその大きさ故に倒壊してしまったのかもしれない。



牛谷坂の倒壊常夜燈推定復元図 1:150
斜線部分は確認できないため桜木町の常夜燈から比例推定 図中の人物は身長170cm

宇治

坂を下ると、右側に宇治惣門跡の碑が立っている。宇治惣門は黒門とも呼ばれ、参宮街道の番屋の役目を果たした。さらにすぐ先の黒門橋（滝倉川）を渡り、御木本道路に出て左折する。

すぐ、猿田彦神社の門前を過ぎる。祭神の猿田大神は伊勢神宮の鎮座以前に五十鈴川流域を支配していたといわれ、またその末裔が内宮鎮座の先導をしたという伝説から、道案内の神ともされる。

神社に面する国道23号線浦田町交差点を横切って、次の路地を右折する。ここより内宮の門前、俗にいう「おはらい町」に入る。最終目的地の内宮までは、あと少しである。「おはらい町」は、一般庶民が神宮での祓を受けられなかった当時、御師などの下級神官がここに館を並べ、いわば「代理・出張御祓い」をしていたことからついた俗称である。明治4年(1871)年の御師廃止以後は、土産物屋街として発展してきた。近年では伊勢市内観光の目玉のひとつとして光が当たってきている。平成5年(1993)の遷宮を機会に、従来進められてきた町並の修景事業も一段落し、それに関連して、電線の地中埋設(旧慶光院以南)、路面の石畳化などの事業が実施された。

おはらい町入口から200mほど行くと、左手に神宮道場(神宮司庁旧庁舎)、右手に祭主職舎(旧尼寺・慶光院)がある。どちらも豪壮な建物である。慶光院は豊臣秀吉の命で造営されたといい、土塀に入った5本の筋が格式の高さを物語る。

これより南が、本格的な町並修景区間で、新築・改築の際には近世～近代初頭風に整えている。伊勢五十鈴川郵便局は、ポストも郵便事業創業(明治4年、1871)当時の「書状集箱」を擬したものを使用、百五銀行では建物に風情を出し、キャッシュサービスを「現金自動取扱機」としている。また創業宝永4年(1707)の看板が上がる赤福本店は、明治初期に建った現在の店舗を大事に使ってきたことが、ここへ来て報われたというところであろう。赤福本店横の道は、新橋を渡って宇治館町方面へ続いている。

おかげ横丁

遷宮を記念して造られた町、それがこのおかげ横丁である。一種の飲食・土産物屋街ではあるが、他の観光地のそうしたものは一味も二味も違っている。

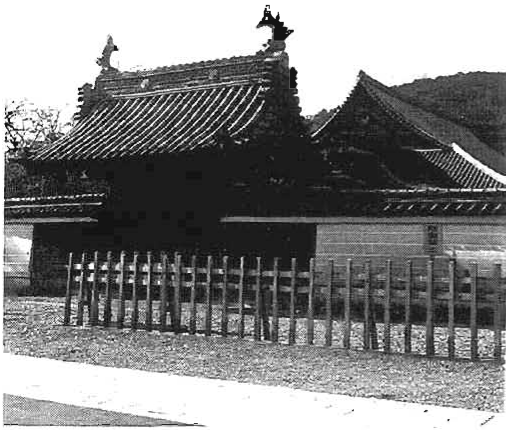
町を構成する建物は、一部を除いてほとんどが伊勢の伝統的建築手法によっている。時代設定は現在の赤福本店が建てられた明治10年(1877)前後。移築・再現のものはもちろん、創作建築についても「もし当時の大工にこれを発注したらどうなるか」を基準に検討が繰り返された。外観だけでなく、構造部材に至るまで本物で、伊勢建築の特徴であるツガ材を使用して再現している。

テーマ館では、おかげ参りなど参宮の歴史を、一般の観光客にもわかりやすいよう映像化して解説。またこの建物自体の外観が、古市・長盛座のイメージによる。

入口に建つ常夜燈も県内各地の近世常夜燈を参考にデザインされた。その奥すく左側の「伊勢路総合案内所」は単に横丁の案内所ではなく、伊勢路観光の総合情報基地を目指している。将来は「伊勢路と参宮についての資料をそろえ、資料館を併設したい」という。軒を並べる店にも、安っぽい土産物は見られない。一気に人が押しかければ対応の限界を超える、と大きな宣伝もしない方針だという。腰を据え、息の長い展開をする気と見た。ひとつの町を造るような事業だ。発展を期待したい。



おかげ横丁入口の常夜燈



旧慶光院（祭主職舎）



「おはらい町」の町並

赤福本店向かい側（赤福旧本社跡地）には、三重の伝統的建築手法を再現して造られた「おかげ横丁」がある。他所より移築・復元されたもの、過去の建築のイメージを再現したもの、まったくの創作建築といろいろだが、どれも伝統的手法によっており、いわゆる「張りぼて」ではない。横丁入口には石造常夜燈があるが、これも近世の常夜燈を参考にしてデザインされている。

さらに行くくと左側に、「皇大神宮・豊受大神宮御白石」を桶に入れて祀った一画がある。その南側の「すし久」は近年復原・改修されたものである。かなり本格的に手を入れており、外観だけでなく内部に至るまで完全に復原されている。その意味では「おかげ横丁」とともに、おはらい町修景の方向性を示す建築物といえる。

約100m進むと、宇治法楽舎跡の石碑があり、前に神宮御料酒「白鷹」を売る三宅酒店がある。また、上地木工所の店先には、伊勢玩具の伝統を引いたくりもの細工の玩具が並んでいる。

こうした、比較的小規模な店が並ぶ一郭を過ぎると、岩戸屋食堂、二光堂など、大規模な土産物屋が並びはじめる。右手の岩戸屋本店は、もとの塗籠の外観を生かしたまま化粧直しをおこない、従来ビルであった二光堂は、妻入・大屋根の伊勢風建築に建て替えた。

土産物屋街の中を進んで行くと、行く手が開けて正面に鳥居が見えてくる。内宮宇治橋前北側の鳥居である。奈良、京、大阪のみならず、東海道、江戸方面など、多くの起点を持つ伊勢街道。そのすべてがこの鳥居の前で終点を迎える。宝来講の旅もいよいよ目的地に到着である。

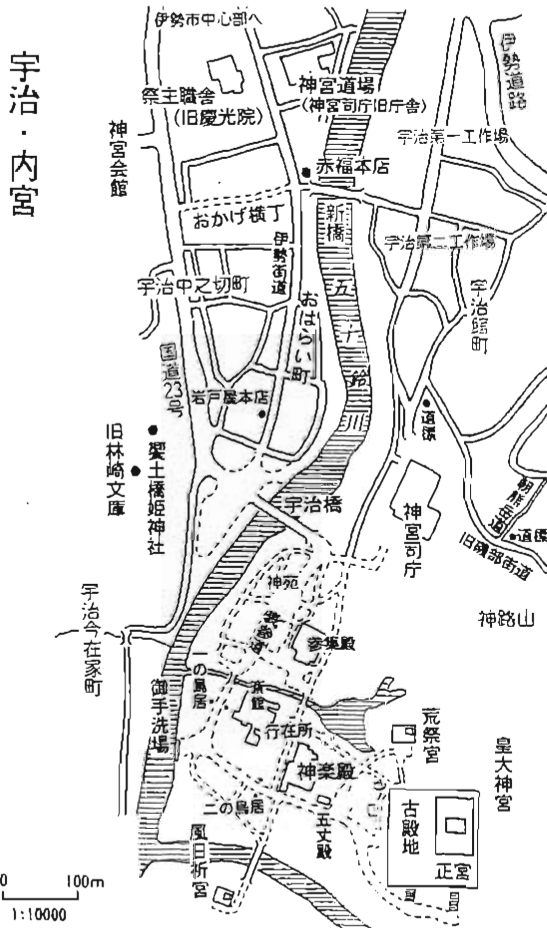
内宮を参拝する前に、先ほど前を通った岩戸屋食堂で昼食をとる。1日目から4日目まで、昼はほかほか弁当で過ごして来た一行にとっては、かなり豪華な昼食である。しかし前夜の痛飲で胃が正常に機能していない者は、これを前に箸を動かすことができず、一方身体が「豪華さよりも量！」を欲している者には、この昼食はお上品だと感じられる。まさに悲喜こもごもである。ただ、こんなことで一喜一憂できるのも、歩き終えた余裕なのかもしれない。

内宮 皇大神宮

昼食後、再び宇治橋前に集合し、内宮を参拝する。

皇祖神、太陽女神とされた天照大神（天照坐皇大御神）を祀っているのが皇大神宮、いわゆる「内宮」である。天照大神宮とも、また五十鈴川のほとりに鎮座することから伊須受宮とも呼ばれる。天照大神は、皇祖神として、また日本各地に鎮座する神々の総氏神、国家の宗廟として尊ばれてきた。

鎮座については『日本書紀』に伝承がある。天照大神はもと宮中の殿内であって、代々天皇が親祭を行っていた。第10代崇神天皇の時代に初めて皇居から出て、皇女豊鍬入姫命を御杖代（大神のヨリマシとしての巫女）として、大和の笠縫邑に祀り、さらに大宮地を求めて丹波、大和、紀伊、吉備などの各地を巡った。次いで第11代垂仁天皇の時代に、皇女倭姫命が代わって大御神に仕え、各地を巡幸したのち、「この地は朝日夕日の来向ふ国、風音の聞こえざる国、弓矢・鞆の音聞こえざる国、大御神の鎮まります国ぞ」と言われ、垂仁天皇26年9月、伊勢の五十鈴川上の現在地に鎮まると伝えられている。



では、内宮でもまた『お伊勢まいり』を参考に神域を見ていこう。

宇治橋 五十鈴川にかかる橋で、俗界と聖界との境といわれる。長さ101.8m、幅8.42m、総檜造の純日本風の大橋である（5日目扉写真）。もともと、現在の位置よりも下流にかかっていたといい、室町期に足利義教によって造宮寄進されたものといわれる。

また、20年毎に行われる式年遷宮の年にはこの橋も造替されるようになっていた。第59回の式年遷宮は、戦後の混乱と国家からの財政分離の影響などで4年遅れたが（昭和28年、1953）、宇治橋だけは正規の年の昭和24年（1949）に造替されている。最近では平成

元年(1989)、第4回宝来講の年に造替された。

宇治橋の外と内とに大鳥居が立っている。内側の鳥居には内宮旧正殿の棟持柱が、外側の鳥居には外宮旧正殿の棟持柱が用いられている。さらに20年たつと、内の鳥居は鈴鹿峠のふもと、東海道関宿・東の追分の鳥居に、外の鳥居は桑名の「七里の渡」の鳥居となる。合わせて60年の勤めを果たしている。

宇治橋を渡っていると、この旅の終わりが近づいていることに、何か感慨深げなものがよぎる。ただ、外宮よりも参拝客の数が多いため、周囲の眼はさまざまである。

宇治橋を渡ると参道は右折して、広々とした神苑のなかを進む。右折せずに、突き当たりから直進する細い道を行けば、神宮を管理する神宮司庁の庁舎に出る。

内宮神苑 宇治橋から右に折れると、玉砂利を敷き詰めた道が続く神苑になる。外とは違った簡素な趣があり、芝生や松もよく整備されている。今はいかにも神域然としているが、このあたりは明治中期まで民家や商店が建ち並んでおり、『伊勢参宮名所図会』(寛政9年、1798)にもその様子が描かれている。財団法人神苑会が買い上げ整備したうえ、明治27年(1895)に献納して現在の姿になった。外宮でもそうだが、現在のままの伊勢神宮に近世の旅人が参宮していたわけではない。むろん、またかわらぬものも数多くある。

神路山 神苑から見える神宮の山々を総称して神路山という。標高150mから400mほどの山山である。

神苑を行くとやがて参道の幅は狭くなる。小さな橋を渡ると手水舎、鳥居が目に入る。

第一鳥居口御橋 外宮と同様、防火のために掘った堀川にかけられており、火除橋ともいう。ここまでは近世に町だったところである。この橋を渡れば神域に入る。この神域の面積は97haに及んでいる。

手水舎 この手水舎が右手にあるので、内宮内は右側通行となっている。この先の五十鈴川岸で口と手を清める人が多いので、この手水舎は比較的空いている。

第一鳥居 檜素木造の神明鳥居である。

内宮齋館 参道の左手にある。外宮齋館と同様に、神職が参籠をする。

行在所 齋館の奥にあり、これも外宮と同様、天皇参拝時に用いる。

参道を進むと、右手に五十鈴川の流れがあらわれる。参道は五十鈴川に寄らないものと、川岸を経て第二鳥居の前でこれと合流するものの二手に分かれている。

五十鈴川の御手洗場 五十鈴川は御裳濯川、宇治川ともいわれる。神路山と島路山に発する二流が、内宮の西南で合流する。神宮の神域を通り、下流で二つにわかれ伊勢湾にそそぐ。流域は約10km。

ここで口と手を清める。いわばお祓い川である。齋内親王(皇大神宮に仕える皇女、齋王)が参向するときはこの五十鈴川で禊をした。今日、神社などで口と手を洗うのは、本来川や海の中

に入っの禊が簡略化されたものといえる。「御裳濯」の名は、倭姫命がこの川で禊をし、旅の汚れを濯いだという伝承によるものとも、地形を表現したものともいわれる。

錦鯉がたくさん集まって泳いでいる。水はよく澄んでおり、美しい。伊勢の人々は、この川には特別な思いがあるといい、特に上流については、神宮への信仰とは離れた、独特の宗教的空間とも考えられているようである。

参道はこの御手洗場前で左に曲がっている。しばらく進むと二つ目の鳥居があり、これを抜けると神楽殿の前に出る。

第二鳥居 外宮と同様、幣帛や勅使のお祓いはここで行われる。

内御厩 第二鳥居をぬけて左手にある。また外御厩が表参道口御橋の外にある。ここにも外宮と同様、神馬が二頭飼育されている。

内宮神楽殿 参道左手、銅板葺、入母屋造の建物。向かって右端から神楽殿、御饌殿、神札授与所。皇大神宮、別宮の神の御神札、守祓（お守）、神宮曆の授与、また御神楽の奉奏、御饌の奉奠（初穂料を奉り、お供えをささげ、御神楽をあげ、祈禱すること）を受け付けている。神楽は神遊びともいい、日本で上古から神事に用いられてきた歌舞である。

五丈殿 神楽殿のすぐ東にある。その正面の長さから五丈という。雨天時のお祓いなどに用いる。古くはこの近くに直会殿なほけいの一院があって、このうちに九丈殿、五丈殿、四丈殿があったが、今は五丈殿だけが残っている。

御酒殿 五丈殿の北、切妻造、柿葺の殿舎。御酒殿神をまつる。古くは諸神に供える神酒を醸造する所であった。現在はお供えする神酒をここに納める。

由貴御倉 御酒殿の東にならんでいる神明造の社殿。由貴御倉神をまつる。古くは由貴の大御饌祭の供物を納めておく御倉であった。由貴とは清浄な、けがれない、の意。

四至神 五丈殿のすぐ東の石畳にまつる石神。大宮の境界の守りである。

忌火屋殿 五丈殿の東の切妻造、二重板葺の建物。内宮、内宮所管の宮社の神饌の調理がされる。忌火を用いるのは外宮と同様である。

これらの建物群を抜けると、参道はゆるいカーブを描きながら、杜のさらに奥へと進んでいく。外宮のように広々とした感じは受けない。やがて正面に正宮のある、一段小高くなったところが見えてくる。参道の正面に見えるのは、平成5年(1993)の第61回式年遷宮まで正宮があった西御敷地。現在はさらに奥の東御敷地に正宮がある。小高い丘を南へ回り込むように参道が曲折すると、左側にはその西御敷地に上がる石段がある。現在は使われておらず、簡単な柵がしてある。

西御敷地 いわゆる「古殿地」で、外宮と同様、次の式年遷宮時に新しい正宮を建てる場所である。東御敷地が現在の殿地で、西が古殿地、という関係は外宮と同じだが、外宮とは参道の向きが逆であるため、外宮とは逆に、この20年間は古殿地の前を通って正宮に至ることになる。た

だし、内宮正宮は小高い丘の上にあるため、古殿地の様子をうかがうことはできない。正月の大混雑時には臨時通路が設けられ、古殿地側の石段が下り専用として使用される。古殿地周辺をじっくり観察できるのはこの時だけである。

外宮と同様、平成6年(1993)3月末までは古殿が残されており、特別資格による拝観ができる。4月からは解体工事が始まり、また次の遷宮にそなえることになる。

この古殿地下を過ぎると、まもなく参道の一番奥、現在の正宮である東御敷地の石段下に達する。西御敷地よりさらに長い石段の上に、正宮の鳥居(板垣南御門)が見える。

皇大神宮正宮 太陽神・皇祖神である天照大神をまつ。相殿神として、東に天手力男神、西に万幡豊秋津姫命の二座がある。

正宮前に着くと、外宮と同様に番塀の後ろに荷物を置き、石段を登る。板垣南御門内に進み、生絹の御幌のかけられている外玉垣南御門前にて参拝する。

参拝の方法などについては外宮と同様である。ただ、平面的な外宮と異なり、内宮では正宮前の石段を登らねばならない。これを一步步登りながら、やっと来た、という感慨を持つことも多いのではないだろうか。無事に完全踏破して、その道程を思い返す者。あるいは途中不本意ながらサポート車に救護され、捲土重来に期する者。その胸中さまざまではあろうが、無事到着の実感が迫ってくる場所といえるだろう。



参拝を終え、石段を下って退出する。石段をバックに整列し、恒例の記念撮影である。

石段下を右折すれば、往路と逆に参道は古殿地下の石段の前を抜け、神楽殿方面に戻る。五丈殿の手前から右へ入る道は、別宮の荒祭宮へ続く。

荒祭宮 天照大神の荒御魂をまつ。西御敷地のちょうど裏手にあたるうえ、別宮で鳥居がないのはこの社だけであることから、正宮と一体になった社と考えられている。

この参道は正宮のうしろへ回り込んでおり、正宮裏手にある建物群の様子を拝するには絶好の場所である。

神楽殿で御神札を授かる。これも外宮と同様である。とくに定められているわけではないが、帰路は神楽殿の角を右へ折れ、裏御橋、外御厩から参集殿経由で神苑に出るのが一般的になっている。

式年遷宮と神宮の建築

式年遷宮

式年遷宮は、伊勢神宮で最大かつ最重要の式典である。20年に一度、すべての殿舎・神宝類を新調し、新しい正殿に御神体を遷す。「式年」とは「定まった年」の意味で、ここでは20年という年限を指している。

掘立式という、朽ちやすい構造から、もともと造替・遷宮はあったと思われるが、20年ごとの遷宮が制度として確立したのは、天武天皇の時代といわれる。延暦23年(804)の儀式帳に初めて詳しい規定が記され、ほぼ同じ規定が『延喜式』に記載されたことで国家行事として公認された。その後、南北朝時代や戦国期など、国家的な非常時には中断があるものの、今日まで1300年にわたって続けられてきた。

社殿の陳腐化を防ぐためだけでなく、建築物を新しくすることによって権威の再生・更新を図る、といった目的もあったのであろう。飛鳥地方における古代宮殿が、一代ごとに建て替えられていたことなどと同じ発想である。とくに、伊勢信仰は「森の文化」「素木の文化」を象徴するものであるから、朽ちた建物ではその権威を保つことはできないと考えられたものかもしれない。

また、20年は「人間社会」においてもほぼ代替わりの時期であり、技術伝承の面から見ても、こうした周期の設定には興味深いものがある。

遷宮への足どり

さて、ひとくちに「すべての殿舎・神宝」といっても、内宮・外宮だけでなく、合わせて14ある別宮も全て遷宮を行うのである。殿舎の造営に必要な檜の原木は13,600本、新調される神宝は189種491点、装束はなんと525種1085点にも及ぶ。このため、遷宮の準備はおよそ8年前の「山口祭」から始められる。20年という周期の、実に五分の二が次の遷宮の準備に費やされていることになる。

[平成5年第61回式年遷宮にいたる諸祭・諸行事]

昭和60年(1985)5月～9月 [おもに用材伐木の行事]

山口祭・木本祭・御杣始祭・御船代祭など 木曾の御杣山から用材を伐り出す。

昭和61年(1986)4月～昭和63年(1988)4月 [おもに用材運搬関係の行事]

お木曳初式・お木曳行事など 木曾より伊勢入りする用材を運搬する。

平成元年(1989)11月 宇治橋渡始式 三代夫婦による渡り初めが行われる。

平成4年(1992)3月～7月 [正殿の造営に関する行事]

立柱祭・御形祭・上棟祭・檣付祭・薨祭 建築そのものにかかわる行事である。

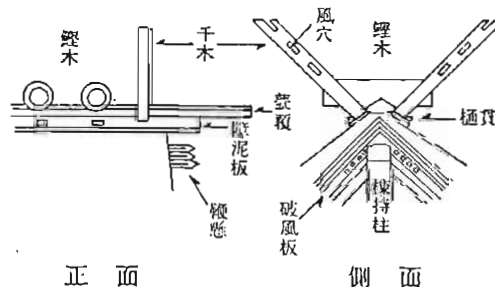
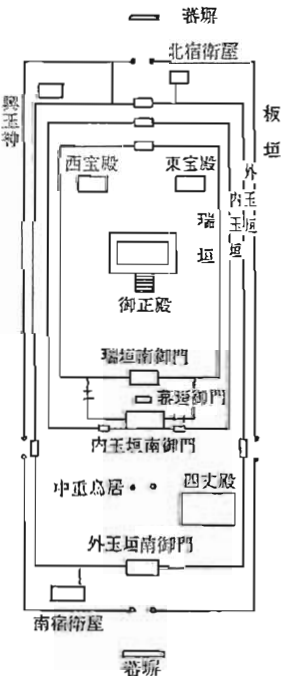
平成5年(1993)8月 御白石持行事

神域内に敷く白石の奉献行事 このときに限り、神領民も正宮に立ち入ることができる。

平成5年(1993)9月～10月

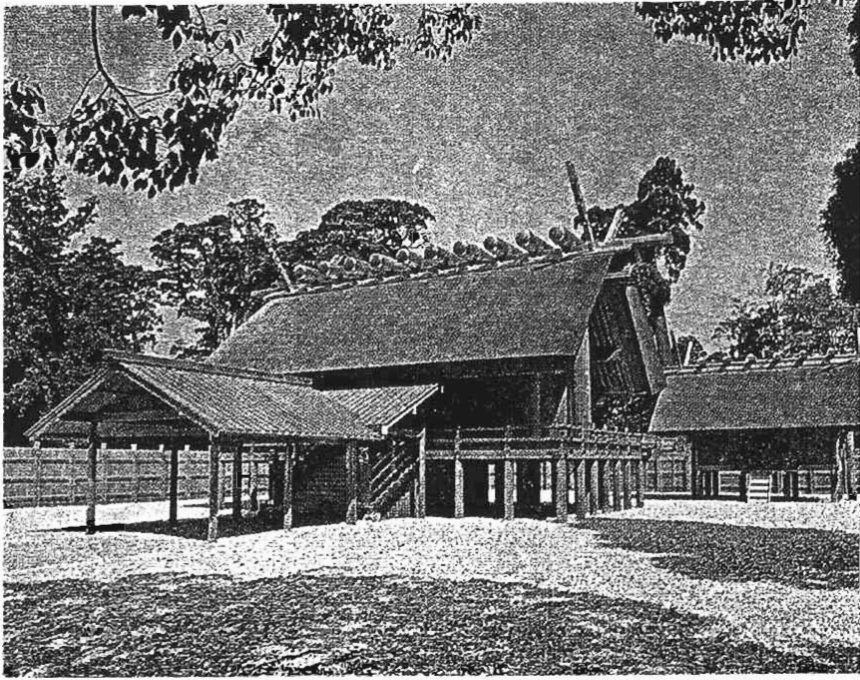
[新正殿に御神体を遷すための準備行事]

御戸祭・御船代奉納式・洗清・心御柱奉建・杵築祭・後鎮祭・御装束神宝読合・川原大祓・御飾完成した新正殿はそのままではただの建物であり、これを本当の意味で「正殿」とするためのさまざまな準備の行事である。



皇大神宮の屋根と垣の構造

[『お伊勢まいり』(神宮司庁)より]



そして、平成5年(1993)10月、遷宮祭の中心行事である「遷御」が行われた。今回は内宮が10月2日、外宮が10月5日であった。残念ながら一般の参観は許されていないため、その詳細を直接目のあたりにすることはできない。しかし、過去の絵図や最近のTV映像資料から、その断片はうかがうことができる。遷御は夜間に行われ、神官の行列が古い正殿から新しい正殿へと御神体を運ぶ。行列のうち、御神体の周囲には幌(ぼり)が張られている。奈良・春日若宮おんまつりの遷幸・還幸の様子を想像すれば、ほぼ近いようである。また悪霊を近づけぬよう、神官は「ホー」と声を出しながら歩くというが、これもまた似ている。

遷御の後も、新しい御饌を奉献する行事、皇室からの供物を供える行事、古殿の神宝を移す行事、御神楽などが行われ、正宮に関する遷宮行事は一段落する。しかし、さらにその後も別宮の遷宮祭が行われ、すべての行事が終了するのは平成6年(1994)である。その意味では9年を要する行事ともいえるわけである。

神宮の建築

神宮の建築に関する記録は奈良時代の正倉院文書にあり、形式、大きさなどもほぼ現在と同じである。神宮独特のこの建築様式を、他の神社の神明造と区別して唯一神明造と呼ぶ。おもな特徴をあげておこう。

- ①柱は丸柱の掘立式で、地中に埋め立てられている。
- ②屋根は切妻造の平入で、萱葺である。
- ③屋根の両妻にある破風が延びて屋根を貫き、千木となっている。
- ④棟の上に鯉木が置き並べてある。
- ⑤棟の両端を直接支えている棟持柱がある。
- ⑥すべて直線的で、必要な覆金物、飾金物のほかは装飾や彩色がなく、素木造である。

出雲大社の「大社造」とともに、現代に伝えられる日本建築のうちで、最も古い形式である。大社造が古代住居の形式であるのに対し、唯一神明造は、高床式の穀物倉庫から発展したものとされている。

正宮の御垣内は6807㎡ある。殿舎や御垣の配置や構造は、外宮と内宮ではほぼ同じである。正殿は萱葺で、その棟に鯉木(内宮10本、外宮9本)が並ぶ。内宮内の鯉木は、外宮の奇数に対してすべて偶数とされている。千木の先は内宮が地面に対して水平(内削)、外宮は垂直(外削)である。

正殿の正面は三間、側面二間、床を高く張り、柱の間は、正面中央に板扉があるほかは、すべて横板壁である。外周には簀子縁をめぐらし、33顆(外宮31顆)の居玉が飾られた高欄をつけている。また正面(南)に10級の木階をつける。屋根の両妻は径79cmの太い棟持柱が支えている。門口11.18m、奥行5.45m、棟の高さは10.30mである。

内宮と外宮との違いとしては、他に次の点があげられる。内宮にのみ瑞垣と内玉垣の間に蕃垣がある。内宮にのみ内玉垣の東西掖門がある(外宮には西掖門がない)。東西の宝殿の位置が異なる(内宮は正殿の後方左右。外宮は前方左右)。内宮にのみ中重鳥居の左右の八重櫓がある。内宮には御饌殿がない。内宮の外幣殿は板垣の外にあり、外宮の外幣殿は板垣の内にある。

番外・よりみち 伊勢案内

宝来講では、ほとんど全員が五十鈴川から特急で帰っている。しかし、伊勢には寄り道したいところも多い。伊勢の雑学も含めて、ここでちょっと紹介しておこう。

おはらい町の伊勢玩具

内宮門前のおはらい町には挽物玩具を作る「上地木工所」があり、店頭にはヨーヨーをはじめ、木目の美しいけん玉やだるまおとし、コマなどが並んでいる。ヨーヨーやけん玉は誰もがつい手にとって遊んでみたくなる不思議な魅力を持っている。日本各地からやって来る参宮客は、ここでふと、ふるさとの思い出を思い出すにちがいない。

江戸時代、伊勢には「お蝶の手車」と呼ばれる名物があった。明治44年刊の『うなみの友』には「伊勢国山田辺の玩具おてふの手車、昔時おてふといふ女此玩具を作り町中を売歩行しに、幼童皆購ひて玩弄せしに今に至り同所名物の一つとなれりといふ」と記されている。「手車」とは今でいうヨーヨー（縁日などで売っているゴム風船ではない）のことで、幕末に著された『守貞漫稿』によると土製の菊形を二つあわせて間を管でつなぎ、その管にひもをまいてあったという。

現在、お蝶の手車を目にするのは難しいが、木製のヨーヨーは伊勢玩具として作り続けられている。江戸時代、参宮者の土産物として発達した伊勢の玩具は、少しずつ形を変えながらも、昔の人の温もりを伝えてくれている。

古市

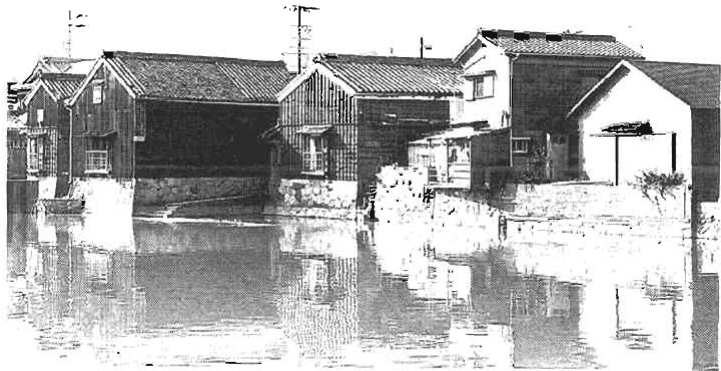
震災に遇い今は面影もないが、江戸時代の古市は、江戸吉原・京都島原・大坂新町と並ぶ伊勢国最大の歓楽地。最盛期の天明(1781-89)頃には妓楼70、遊女一千、大芝居小屋2、人家342を数えた。備前屋、杉本屋、油屋が三大妓楼。この油屋で寛政8年(1796)に起きた遊女をめぐる刃傷事件は、芝居に脚色され「伊勢音頭恋寝刃」として大坂で上演された。古市発の情報も多かったわけである。

享和2年(1802)、伊勢を訪れた滝沢馬琴は次のように記している(『羈旅漫録』)。

「古市はいづれも大棲なり。見せは暖簾二重にかけてあり。軒はつねののうれんの如し。奥行一間の土間ありて、そのあがり口に又長暖簾をかける。見せの隅にちひさき曲突にから茶がまーツかけてあり。是は茶店の名目なればなり。(中略)伊勢の妓楼しかるべきもの。第一古市。第二松坂。(後略)」

河崎 ——運河に蔵が並ぶ街——

小田橋から勢田川を下っていくと、簀子橋、錦水橋、桜橋、JR参宮線、清田橋、清浄坊橋、そして南新橋、中橋、北新橋と続く。南新橋から北新橋までの間が河崎町である。ここは、江戸時代の伊勢経済を支えた地区で、商家が軒を運んでいた。勢田川を逆上ってきた船から直接荷下ろしできるよう、川に面して蔵が建ち並び、独特の趣があった。河川改修のため、現在川沿いに残る建物は少ないが、中橋の北側には往時の面影をとどめた一郭が残る。町の北端に「河崎まちなみ館」があって、河崎についての生活資料を展示している(日曜・祝日のみ開館)。



河崎界隈
勢田川に面して並ぶ蔵

朝熊ヶ岳・金剛證寺 一神宮の鬼門鎮護寺 一

内宮のすぐ裏、現在は廃道となっている磯部街道の旧道に面して「朝熊岳道」を示す大きな自然石の道標がある。現存日本最古の石造道標ともいわれている。ここが、朝熊ヶ岳にある金剛證寺への登り口である。金剛證寺は神宮の鬼門を護る寺といわれ、中世には神宮の神官が納経するなど非常に親密な関係にあった。当然、近世の庶民にとっても両者は一体と見えたらしく「お伊勢参らば朝熊をかけよ 朝熊かけねば片参り」などと謡われて参詣が流行した。頂上までの、通称「岳道」には現在も町石が残る。山頂（標高553m）からの眺望は近世にも著名で、足元の伊勢・志摩はもちろん、遠く海の向こうに富士山が姿を見せる日もある。俗に、山頂から十八州が見えるといわれている。



神宮徴古館

御師邸にあった堂々たる八脚薬医門（神宮文庫）

倉田山 —— 徴古館・美術館・神宮文庫 ——

神宮の博物館。それが神宮徴古館と神宮美術館である。ルネッサンス風建築の徴古館には、神宮の装束・神宝類や、伊勢信仰にかかわる史料など、多数が納められている。宝来講の面々なら参宮関係史料に興味が集まることだろう。美術館は今次遷宮を記念して新築され、従来徴古館に収蔵されていた美術品が移管された。かつてこの美術館の場所にあったのが、農業神の外宮にちなむ農業館。独特の外観をした明治の木造建築だった。照明もない展示室は、一言でいうなら「小学校の理科室を覗く恐怖」。知られざる伊勢名所だったのだが、現在は「閉館中」扱い。やがて再建の予定という。

一方、神宮文庫は神宮の図書館。入口に両端に鯨が上がった八脚の薬医門が建っているが、これは御師・福島御塩焼太夫邸から移築されたもの。御師最盛期の当時を伝える、数少ない遺物である。

お伊勢まいり資料館 —— 紙人形で見る伊勢参り ——

猿田彦神社東側、市宮浦田駐車場の北隣にあるこの資料館。いわゆる「史料」などはなく、約4000体の和紙人形によって再現された参宮風景を展示している。道中の様子は、名所図会や広重の絵図などを参考に製作されており、考証も行き届いている。それと同時に、多数登場する愛嬌たっぷりの猫など遊び心も十分で、純粋に人形として見ても楽しめる。

備前屋・長盛座など古市の姿、御師邸での神楽の様子と、現在実物が残っていないものも再現されている。これらは、名所図会などで見るよりも、紙人形のほうが実感がつかめることだろう。

〔番外編〕伊勢暦

伊勢神宮で売っている暦、と聞くと、陰陽道による占いの類かと思ってしまう。「神宮館」や「高島易断」などの印象が強いからであろう。しかし、実際の伊勢暦を開いてみれば、まるで理科便覧かと思うような、科学的データの羅列なのである。節気、日の出・日の入り、月・惑星の運行、潮の干満、平均気温、平均気圧に、降水量。神宮で製作していることを感じさせるページは、全国有名神社の例大祭日一覧くらいのものだ。

これには理由がある。近世庶民が、神宮を「農業の神」として尊んできたからである。太陽神（内宮）と食物神（外宮）の組み合わせである伊勢神宮は、農民からすれば農業の神そのものであった。すでに江戸時代から、伊勢暦は農業に役立つ実用的な暦として喜ばれ、参宮土産や御師の伊勢土産として流布されてきた。その結果が現在の神宮暦なのである。



朝熊岳道の道標
寛永3年銘
存在が確認できるなかでは日本最古のもの

五十鈴川 駅へ

再び宇治橋前へ出て、ここでしばらく自由時間をとっている。赤福本店で再集合するまでの時間を利用して土産物を買う者、赤福本店北隣の五十鈴茶屋・五十鈴蔵を見る者、朝熊岳道の道標を見に行く者など、それぞれに分かれて行動する。

赤福本店に集合、明治初期に建てられた店で、のんびり、赤福餅をいただくのも恒例となっている。疲れた身体には甘いものが心地よく、歩く旅の時代に甘いものが名物になるのもうづけることである。この店では、現在でも店先の竈に薪をくべて湯を沸かしている。餅とともに配られるお茶は、赤福自家製の焙じ茶で、赤福とは絶妙の相性である。

旧街道を浦田町方面に引き返して、浦田町交差点から国道23号線（御幸通）に入る。ここで長らくお世話になってきた伊勢街道に別れを告げる。御幸通の両側には石の灯籠が数m間隔で建ち並んでいる。灯籠の多くは、昭和31年(1956)ころ立てられたものようだが、一本々々に施主名が刻まれており、当時の高名な財界人などの名も見える。

途中の中村町で23号線は右側の新道（南勢バイパス）、左側の旧道（御幸通）に分かれており、五十鈴川駅へは左の旧道を行く。この付近の旧23号線沿いには民家・商店などもなく、両側に森が続いている。月読宮の入口を右側に見て過ぎれば、前方に近鉄鳥羽線の高架橋が見えてくる。両側の森が途切れ、この高架橋の下をくぐると、築堤に沿って左側に上がる道がある。これを行けば、五十鈴川駅の駅前広場に出る。

ここでサポート車と最後の合流である。遠隔地へ帰省する者やOBなど、ここから直接帰宅する者も多いので、全員が顔を揃えるのは、これが最後になる。5日間にわたり、近世と現代との橋渡しを務めてくれたサポート隊の健闘を讃え、また講元の鎌田先生より講評の言葉を頂いて、ささやかながら解散式となる。

鎌田先生から講評を頂く（第6回）



大学に寄らない者は預けていた荷物を受け取り、帰り支度が整うと、奈良へ向かう大学組、大阪方面などへの直行帰宅組、名古屋方面へ向かう遠隔地組など、それぞれに別れて行く。

名残惜しいという気持ち。もう二度と来るか！という気持ち。人それぞれではあろうが、「非常」を極めた5日間が終わるという不思議な感覚は共通するものであろう。参加者の一人一人が、自分の限界点ぎりぎりまで頑張る。そのためのいらいらもある。行き違いや対立も起こる。しかし、近世の伊勢参りが、娯楽という面とともに「若者の通過儀礼」という性格も持っていたことも忘れてはならない。現代の旅とは違い、近世の旅は自己解放・自己確立の旅でもあったわけだ。宝来講で、我々はそれに近い経験をしたのではないだろうか。さまざまなものを包み込んで、なお多くのものを与えてくれる旅である。

旅の終わり

近鉄特急に乗れば、約2時間半で奈良である。近代交通機関の速さをこれほどまでに感じることは、一生のうちでもそうない経験だろう。初参加者にとっては、少なからずカルチャーショックがあるのではないかと思う。現在は、奈良方面からの参加者ほぼ全員が同じ特急で帰っているが、この形は第2回(1987)から始められた。このときには、列車が榛原トンネルを抜け、朝倉へ向けての長い下りに差しかかると「あ、旧道、旧道！」「歩いたと見える！」と、一同騒然となったりした。

八木で樞原線に乗り換えである。大阪組と同じ特急がとれている場合でも、同行できるのはここまでである。さらに西大寺で、大学へ戻らない組が離れる。乗り換えのたびに人数が減っていく。旅の終わりを実感する。

大学へ戻る組は、もうひと駅乗って平城駅で下車である。駅から大学への帰路途上、山陵八幡神社に寄って無事帰村を報告する。

20分ほど歩けば、4日前に歩いて出発した大学に帰着である。日が暮れているせいもあるが、ずいぶん違う場所に見えたりもする。大学ではサポート隊の到着を待ち、到着後は荷下ろし、あと片付けなどをして業務を終了、これで正真正銘の解散となる。

伊勢での興奮状態が、ここまで続いていることも多い。名残惜しく、なかなか帰りだせないこともある。夢見心地の不思議な5日間が終わる。